

しゅとう
種痘で人々の命を — 緒方洪庵 —
おがたこうあん

「お、お母ちゃん。いて、いてえよう。」

たえきれない苦しさにもがきながら、弱々しく動かししている男の子の手足に、そして、高い熱のために赤らんだ顔やのどにも、先の赤いつぶつぶがはつきり見られます。

「これは、まちがいなく天然痘だ。このままでは死んでしまう。何とか助けることができたとしても、できもののあとが顔一面に残るだろう。種痘の種がほしい。種さえあればなあ。」

大阪で町の人々を治療していた緒方洪庵先生の顔色は、厳しくもっていました。

今までにも、天然痘で苦しむ人を何度も見ながら、どうすることもできなかった洪庵先生は、イギリスやオランダで天然痘の治療に使われている種痘の種が、ほしくてたまりませんでした。種痘の種さえあれば、このいたましい病気から、大勢の人々を救うことができます。



緒方洪庵像 岡山市北区足守



しばらくして、その種痘しゅとうの種が、日本にも伝えられました。オランダの人が長崎に持ってきたその種が、京都きょうとの笠原白翁かさらはくおうという先生の所へ届とどいたのです。

このことを伝え聞いた洪庵先生こうあんは、ぜひその種をゆずり受け、町の人々を助けたいと考え、大急ぎで大阪おおさかから白翁先生をたずねました。

「わたしは、天然痘てんねんとうにかかって死んだり、顔一面にできもののあとが残ったりするかもしれない大勢の人を救いたいです。白翁先生、どうかお願いします。種を少し分けてください。」と、たたみに額をこすり付けるようにしてたのみました。

洪庵先生の、広く人々の命を思う心と熱心さに動かされた白翁先生は、種痘の種を分けてくれたのでした。洪庵先生はあまりのうれしさになみだを流して、白翁先生の手をしっかりとにぎりしめました。

やっと手に入れた種痘の種です。洪庵先生は、弟子でしといっしょに、町の人々にこの種を使って種痘を広めようと思いました。ところがこまったことに、種痘を受けてくれる人がいないのです。人々は、種痘が安全で、天然痘の予防にとってもよいことを知りませんでした。種痘をしたら、かえって天然痘になるのだという、あやまった考えを信じていたのです。

（どうしたら人々に種痘を信じてもらえるのだろうか…。）

洪庵先生の心の中には、顔一面に広がったむらさき色のできものから、血の混じったうみを流しながら死んでいった人々の苦しみがやきついていましたのです。

（種痘の種が手に入ったのだ。もう、あのような病人を出してはならない。いちばん大切な人間の命を守らなければ…。）



洪庵先生は、雨の日も風の日も町に出かけ、人々に話したり、種痘の大切さを書いた紙を配ったりしました。

こうした苦労が三年も続いて、やっと町の人々は、洪庵先生の言うことを信じるようになりました。種痘を受けるためにたずねてくる人々が、一日一日と増えるようになってきたのです。

このことは、洪庵先生の生まれ育った足守藩（現在の岡山市北区足守）にも伝わりました。さっそく足守によびよせられた洪庵先生は「除痘館」という所で、足守や近くの村々の、およそ五千人もの人々に種痘をしました。

また、先生は、そんないそがしい間にも、町の人々の病気を診察し、貧しくてお金をはらえない人も、分けへだてなく治療しました。さらに、医学を志す後はいののために、ドイツの医師が書いた『医者的心得』を翻訳し、どんな患者に対しても、平等に接することの大切さを伝えました。

洪庵^{こうあん}先生の願いは、日本中に種痘^{しゅとう}を広め、天然痘^{てんねんとう}から人々の命を守ることでした。その願いは、先生の死後、二十年ほどで見事になえられ、今では、天然痘のおそろしささえ、知られなくなつたのです。

※天然痘…皮膚^{ひふ}にうみがたまつたできものができ、高熱が出る病気。今は予防ができる。

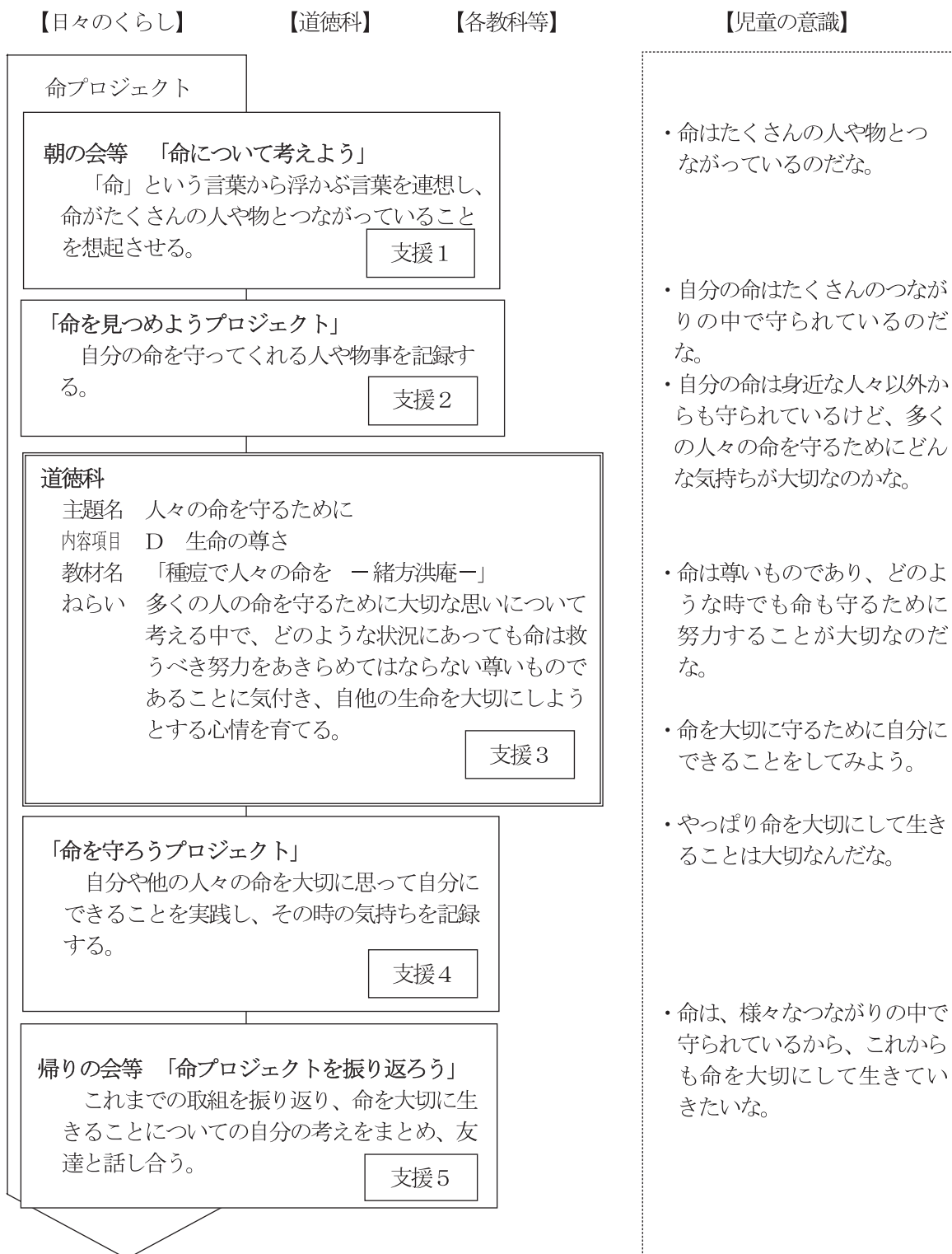
※種痘…天然痘を防ぐために、行われた予防接種のこと。当時は皮膚に傷^{きず}をつけ、そこに種痘の種を付ける方法が行われていた。

1 関連的な道徳の学習のテーマ つながりの中で守られる命

2 関連的な道徳の学習のねらい

道徳科を要として、日々の暮らしと関連を図りながら「命プロジェクト」として学習を進めることで、自分の命を見つめ直して命のかけがえのなさを実感するとともに、命を守るために活動する人々の姿や自分の命を支えてくれるたくさんの人々の思いに触れることで、自分や他の人の命を守り、大切にして生きていこうとする態度を養う。

3 構想図（10月下旬～11月上旬）



4 教師の支援

支援1ー 道徳的価値に対する構えに高めるために

朝の学習の時間などを使って、「命」という言葉から連想する言葉を黒板に書いてイメージを広げる活動を行うことで、命がたくさんの人や物と関係していることに気付き、価値に対する構えをもつことができるようにする。

支援2ー 心を耕し、課題意識を高めるために

「命を見つめようプロジェクト」では、日々の暮らしの中で、自分の命を守ってくれている人々や団体を見つけて記録することを通して、自分の命は家族や医者など色々な人から守られていることに気付くことができるようにする。そして、記録を振り返ることで、「身近な人以外にも自分の命を守ってくれている人がいるが、その人たちはどのような気持ちで守ってくれているのだろう」という課題意識へと高めることができるようにする。

支援3ー それまでに抱いた気持ちを道徳科で語るために

導入では、「命を見つめようプロジェクト」を振り返り、「多くの人の命を守るためにどのような気持ちが必要か考えよう」という課題を明確にすることで、本時の学習の見通しがもてるようにする。

展開前段では、中心場面として、主人公の緒方洪庵が、雨の日も風の日も町に出かけて天然痘の予防に努めていた時に思っていたことについて考えることで、命は尊いものであり、どのような時でも命を守るために努力することが大切であることに気付くことができるようにする。その際、種痘の大切さを誰にも理解されず、あきらめそうになった日もあったかもしれないが、あきらめなかった理由を問うことで、命を支えてくれている多くの人々の行為と重ね合わせながら、どのような状況になっても、命は守らなければならない尊いものであることに気付くことができるようにする。

展開後段では、命を守るために自分自身が意識していることについて振り返ることで、自他の生命を大切に生きていく意欲につながることができるようにする。

支援4ー 道徳科で捉えたことを確かめるために

道徳科で捉えた「これからも自分や他の人の命を大切にしながら生きていきたい。」という思いから、日々の暮らしの中で「命を守ろうプロジェクト」を行うことで、自分や他の人の命を大切に思って行動したこととその感想を記録する。この活動を通して、どのような状況にあっても自分や他の人の生命を大切にする心育てを育てることができるようにする。

支援5ー 自分の変容に気付き意欲的になるために

これまでの学習で記録してきたことを見直し、命を大切に生きていくことについて自分の思いや考えがどのように変容したのかについて振り返りを書き、話し合うことで、自他の命がたくさんの人々の支えによって生かされていることに気付き、全ての命を大切にしようとする思いをより一層強くもたせることができるようにする。

5 要となる道徳科

(1) 主題名 人々の命を守るために

(2) 主題設定の理由

① 内容項目について

中心とする内容項目は、D 生命の尊さ「生命が多くの生命のつながりの中にあるかけがえのないものであることを理解し、生命を尊重すること。」である。普段の暮らしの中で命の尊さについて意識することは少ない。そこで、命の重さやかけがえのなさを感じたり、命を大切にすることを実践に考えたりすることが大切である。この時期には、自分は多くの人々に守られて生きていることに気づき、自分の命だけでなく、他の生命を救い守り抜こうとする人間の姿の尊さを感じることができるようになりたい。

② 児童の実態について

関連的な道徳の学習の中で、日々の暮らし「命について考えよう」を通して、命がたくさんの人々や物とつながっていることに気づき、さらに、「命を見つめようプロジェクト」を通して、自分の命が親や身近に接する人々などたくさんの人々から守られていることを実感しており、命は大切にしなければならないと思っている。しかし、親や身近に接する人々以外の人々が他人である自分たちの命を守ろうとどのような気持ちで活動しているのかについてはあまり意識していない。

そこで、人々の命を守ろうとする時の大切な気持ちについて考えることを通して、命はかけがえのないものであり、何よりも尊重していこうとする心情を育てたい。

③ 教材について

本教材は、江戸時代後期に、当時外国から伝わったばかりの種痘によって、天然痘で苦しむ多くの人々の命を守った緒方洪庵の話である。

天然痘という感染症や当時の時代背景を押さえた上で、「種痘」の大切さを説いて回る場面に焦点を当て、洪庵の行動は富や名声のためでなく、純粋に人々の生命を守りたいという願いに支えられていたことに気付いていけるようにする。また、足守の位置を地図で確認し、また偉業をたたえて石碑が建っていること、今でも「洪庵まつり」が行われていることなどに触れ、親近感をもつことができるようにしていきたい。

◇ 板書例

◇ 命はかけがえのないものであり、どのような時でも守らなければならない大切なもの。 ○ 命を守るために	場面絵 ・ なんでみんな分かってくれないのだろう。 ・ みんなに正しいことを知らせ、命を早く救いたい。 ・ どの命も守るべき大切なものだ。	白翁先生に頼んだ時 ・ どうしても命を救いたい。 ・ 多くの人の命がかかっている。 雨の日も風の日も町に出かけた時	洪庵の 写真 足守の位置や石碑 の写真	種痘で人々の命を ― 緒方洪庵 ― めあて 多くの人の命を守るためにどのような気持ちが必要か考えよう。	命を見つめようプロジェクト ・ 身近な人に支えられている。 ・ 直接関わりのない人からも守られている。
--	--	--	----------------------------------	---	---

◇ 参考

緒方洪庵（1810～1863 年）。江戸時代の終わりに活躍した蘭学者。岡山市の足守出身で、長崎で医学を学び、大阪で医師を開業。大阪に「適塾」を開いて、医者を目指す人々の教育を行った。

(3)ねらい

多くの人の命を守るために大切な思いについて考える中で、どのような状況にあっても命は救うべき努力をあきらめてはならない尊いものであることに気づき、自他の生命を大切にしようとする心情を育てる。

(4)展開

○は基本発問 ◎は中心発問

学習活動	主な発問と児童の心の動き	指導上の留意点
1 命が守られていることを振り返り、めあてをつかむ。	○ 「命を見つめようプロジェクト」をしてみてどう思いましたか。 ・自分の命は身近な人々に支えられている。 ・自分と直接関わりのないたくさんの人々から支えられているな。	・「命を見つめようプロジェクト」を振り返ることで、多くの命を守るときに大切な気持ちは何だろうという課題意識へと高めていけるようにする。
多くの人の命を守るためにどのような気持ちが大切か考えよう。		
2 「種痘で人々の命を 一緒に 洪庵」を読んで話し合う。	○ 天然痘で苦しんでいる子どもを見た時の洪庵はどんな気持ちだったでしょう。 ・何もできなくて悔しい。 ・早く助けたい。 ◎ 雨の日も風の日も町に出かけた時、洪庵はどんなことを思っていたのでしょうか。 ・種痘をすることは無理かもしれない。 ・なんでみんな分かってくれないのだろう。 ・みんなに正しいことを知ってもらいたい。 ・一人でも多くの命を救いたい。 ・どの命も大切だから、何としても救いたい。 ○ 一日一日と種痘を受ける人が増えた時の洪庵はどんな気持ちだったでしょう。 ・信じてくれてうれしい。 ・命を救うことができてよかった。	・めあてを確認した後、教材の脚注を参考にして時代背景や天然痘という病気や種痘のしくみについて解説する。 ・ワークシートに考えを書くことで、多面的に考えられるようにする。 ・「あきらめようと思った日もあったかもしれないけど、どうして洪庵はあきらめなかったのか。」と発問することで、全ての命は尊いものであり、どんな状況になっても守らなければならない大切さを感じ取ることができるようにする。 ・種痘を受ける人々が増えた時の気持ちを確かめることで、人々の命を救うことができた喜びや達成感に気付くことができるようにする。
命はかけがえのないものであり、どのような時でも守らなければならない大切なものだという気持ちをもつことが大切だ。		
3 命を大切に思ってきたかについて振り返る。	○ どんな時でも命は守らなければならない大切なものだったことはありますか。 ・災害に遭われた方のために自分にできることはないかと考えた。	・命はかけがえのない大切なものだったことを話し合うことで、日々の生活の中で命を守ろうとする意欲を高めることができるようにする。
4 教師の説話を聞く。	○ 命を守るために一生懸命活動している人について話をします。	・命を守るための活動について話をする中で本時のまとめとする。
これからも自分や他の人の命を大切にしながら生きていきたい。		
評価の観点	<ul style="list-style-type: none"> ・命はかけがえのないものであり、どのような状況にあっても何よりも救う努力をあきらめてはならない尊いものであることに気付くことができたか。 ・これからも自分や他の人の命を大切に生きていこうとする意欲を高めることができたか。 	

種痘で人々の命を — 緒方洪庵 —

6年（ ）組（ ）

○雨の日も風の日も町に出かけた時、洪庵はどんなことを思っていたのでしょうか。

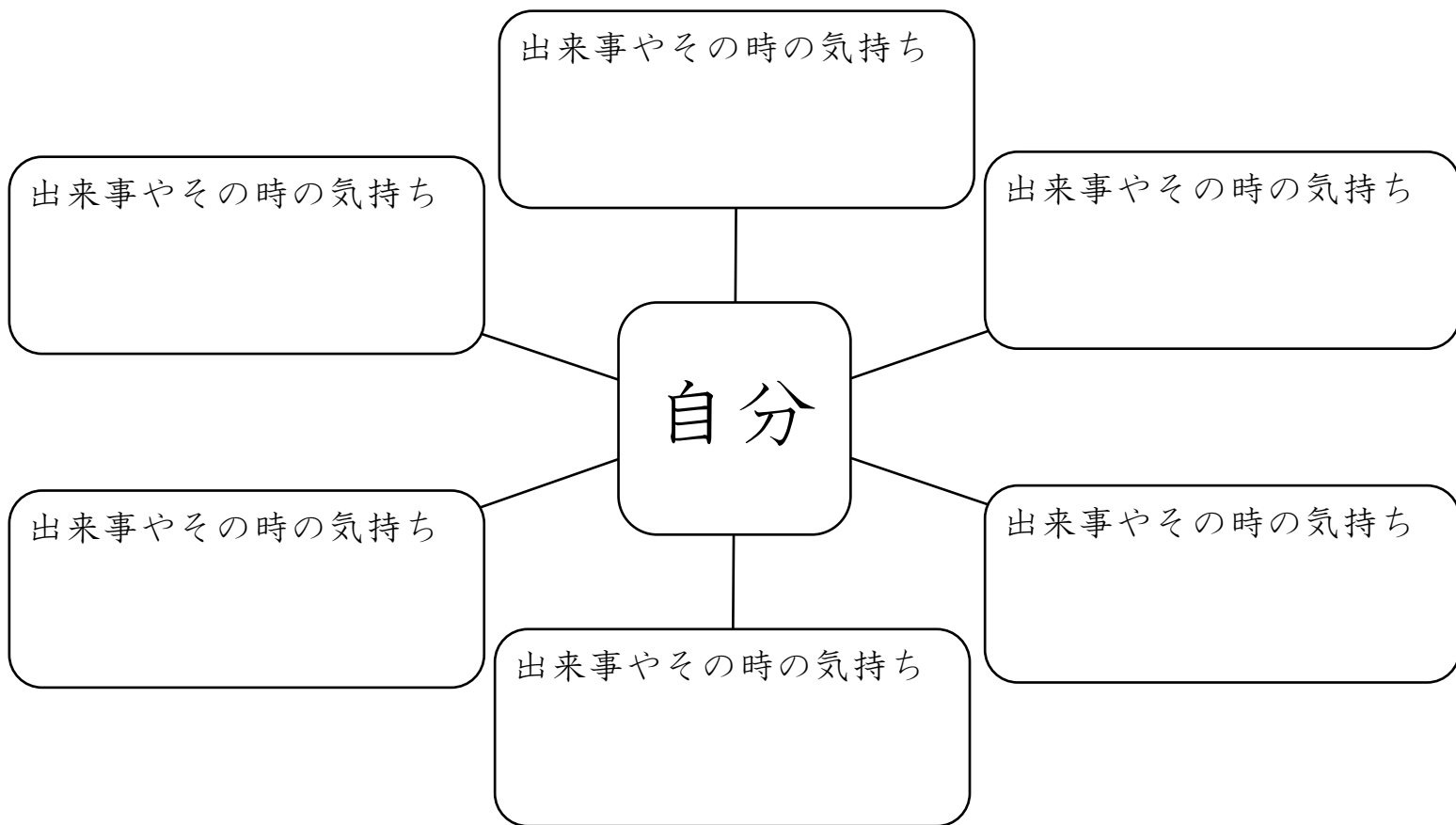
--	--	--	--	--	--	--



○命を守ってくれる様々な人々について記録してみよう。

人物や団体	人物や団体
人物や団体	人物や団体

○命はどんな時でも守らなくてはいけない大切なものだったことや命を守るために自分にできることを記録してみよう。



感想